

# 書評

免疫等の基礎 第5版 ▶ 入村達郎 監修, 辻 勉 編著, 築地 信, 永井重徳, 永田喜三郎, 東 伸昭, 渡辺恵史 著

**免疫学の基礎 第5版** / 入村達郎 監修, 辻 勉 編著, 築地 信, 永井重徳, 永田喜三郎, 東 伸昭, 渡辺恵史 著 / 東京化学同人 2022 / B5判 208ページ 3,200円 + 税

『免疫学の基礎』は1989年に初版が刊行され、免疫学の入門書として高い評価を受けてきた。その後免疫学の発展に合わせて改訂を重ねてきた。今回、第5版として全面的な改訂が行われた。

本書の第1章「免疫学のあらし」では免疫学の歴史、自己と非自己の概念、記憶、クローン選択説、自然免疫と獲得免疫、免疫不全と自己免疫疾患といった、次章以降の理解に必要な概念をわかりやすく解説している。第2章、第3章では免疫細胞について紹介している。初学者にとって理解のための最初の障壁となりうる多種多様な免疫細胞の性質、機能と体内での役割を、要点を押さえて解説している。第4章から第11章は抗体についての解説である。本書では20章のうち8章で抗体について解説している。アレルギー、予防接種、抗体医薬等の理解のために抗体についての確実な知識の習得を重視していることがうかがえる。4章より順に従って読み進めることで、抗体とは何か、基本的な機能、クラスによる構造と生理的機能の違いと徐々に抗体に関する知識を深めることができる。第6章で免疫による抗体の獲得、モノクローナル抗体の作製法について解説し、第7章で遺伝子再構成とクラススイッチについて解説している。基本的な概念を先に学び、その分子機構についてさらに深く学ぶことができる。第8章は抗体と共に免疫に働く補体について、第9章では抗体を利用した検査法、実験手法について取り上げている。第10章、11章では抗原提示、T細胞の分化など抗体の産生におけるT細胞、樹状細胞やマクロファージの役割についての解説であ

る。第12章はサイトカインを扱っている。多種多様なサイトカインについて、基本的な事項、必要な事項を的確に選択し10ページにまとめている。第13、14章は細胞性免疫を取り上げている。ここではウイルスやがんを標的とするキラーT細胞と細胞内寄生菌を標的とするヘルパーT細胞とマクロファージで章を分けて解説している。同様に第15章から19章ではアレルギー、自己免疫、免疫不全、がんを取り上げている。このように後半の各章では学習者が疾患とそれにかかわる免疫を紐づけ、整理して理解できる工夫がなされている。第20章では免疫学の進歩の大きな成果である抗体医薬と免疫療法についてわかりやすく記載されている。

本書の最大の特徴は監修者が序で述べるとおり、“やさしさ”、“わかりやすさ”である。全体を通して平易な表現を用いており、用語解説が本文のすぐ隣に添えられている。また図表も簡潔でわかりやすく、非常に読みやすい。随所に登場する親しみやすいイラストは、内容を直感的に表現するものであるとともに、「クスッ」と笑わせられるような面白さもあり、学習者にとっては箸休めにもなるだろう。アドバンスまたは最新の知識についてはコラムの形で掲載されている。本書を一読した後コラムを読み返すことで、さらに理解を深めることができる。

免疫学は感染症、自己免疫疾患、アレルギー、がんといった疾患、臓器移植や予防接種、分子標的薬等の予防治療法の理解に必須の学問である。一方で免疫学研究の発展により、膨大な知識が蓄積されており、今後も増え続ける。これから免疫学を学ぶ者にとっての最初の入り口を選ぶことは容易ではない。本書は免疫学の本質的な基礎を身につけるための入門書として、最適な一冊である。

(伊藤佐生智 名古屋市立大学大学院薬学研究科)